

Title	ジョージ・ブレスウェイトの死について : ロンドンのクエーカー ライブラリー所蔵の資料紹介
Author(s)	黒木, 章
Citation	キリスト教と諸学 : 論集, Volume21 : 174-195
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=2824
Rights	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

ジョージ・ブレスウエイトの死について

——ロンドン・クエーカーライブラリー所蔵の資料紹介——

黒 木 章

はじめに

わたくしは、二〇〇二年六月にジョージ・ブレスウエイトの資料に出会って以後、休みを利用してロンドンのクエーカーライブラリーを訪ねることにしている。幸い二〇〇五年には短期研究休暇の許可が出たので、夏休みの約一ヶ月間を使ってその資料の点検と確認に没頭することができた。

長くジョージ・ブレスウエイトに関する一次資料を探していた理由や発見時の興奮ぶりについては先に報告したので、『聖学院論叢』第十六巻第一号（二〇〇三年一月）、そちらを見ていただきたいが、わたくしの当初の関心は、ジョージ・ブレスウエイトが北村透谷の思想形成あるいは日本における最初の平和運動に深く関わる具体的な様相を解明することであった。

しかし、一八八六年五月に『The British and Foreign and Scotch Bible Society's sub-agent』として来日し、一九三一年六月に東京赤坂で召天した彼が残した膨大な手紙類を初めとする資料（クエーカーライブラリーはそれを十三個

の大型紙箱に収納して保管している)を読めば読むほど、彼の活動が日本のキリスト教伝道に如何に重要な意味を持つたかを思わせられる。

先ず挙げられるのは、(あ)日本各地を旅行してキリスト教の関係書類を販売する書店網を作ること、(い)主としてプロテスタントの宣教師や指導者から各地のキリスト教伝道の実情を聞いて宣教師・指導者の相互連携と協体制度を模索したこと(各地の宣教師名とその住所を小冊子にして毎年配布している。このことはここで紹介すること、(え)クエーカー派の伝道雑誌『聖書之友』(雑誌作りの中心メンバーの一人が彼の姉メリー・キャロライン・ブレスウエイトである。彼女は、赤坂病院を創立して貧民救済の医療伝道をしていた眼科医ウィリス・ホイトニーと結婚して一八八六年三月に来日した)の製本・販売をすることなどである。

あまり知られていない重要な活動として、(お)在日米公使館の通訳でもあった義兄ウィルス・ホイトニーと協力して外国人が日本政府に旅行許可証を申請(外国人宣教師・伝道者には不可欠の手続きである)する際の手伝いをする事、またこれとの関連で(か)大日本帝国憲法や各地の条例を英訳して解説を付け更に全国の主要道路地図までも付けた外国人のための旅行案内書を作成したことなどがある。これらのことも看過できない文化的な活動として是非挙げておかなければならないだろう。

ジョージ・ブレスウエイトの活動を具体的に明かす資料については今後主題毎に翻刻・紹介するつもりであるが、ここではロンドンのクエーカーライブラリー所蔵の資料(TEMP MSS 980)のうち次の三つの資料即ち便宜的に番号を付して示した①一九三一年六月一日に彼が召天した際の「死亡診断書」一枚、②『聖書之友』に掲載された四つの追悼記事、③ロンドンでクエーカーが発行していた月刊誌THE FRIENDに掲載された記事について翻

刻・紹介したい。

なお、ここで翻刻・紹介する資料には説明や訂正を要するところもある。このような場合には本文中に（*注）（*注1）などを挿入しているのでお断りする。

資料① 死亡診断書（クエーカーライブラリー所蔵 TEMP MSS 980 BOX6）

死亡診断書（*注1）

PHYSICIAN'S CERTIFICATE OF DEATH

国籍 英國人

1 Nationality BRITISH

人名 ショージ・ブレスウエイト

2 Name in Full GEORGE BRATHWAITE

男女ノ別 男 生 一八六一年三月五日

3 Sex MALE 4 Date of Birth March 5th 1861

職業 宣教師

5 Profession or Occupation MISSIONARY

最後ノ診察 一九三一年六月一八日

6 Time and Date of Last Visit 18th June 1931—4:15 A.M.

病名 心臓麻痺

7 Name of Disease acute elepocarditis (ier feaw waviac of the Ceart-wisidecl)

after artiteucuar ebuwaisur (*註②)

If in doubt state principle symptoms and probable cause of death

發病 一九三二年六月一日

8 Date when taken ill 1st June 1931

死亡 一九三二年六月一八日 午前四時十五分

9 Time and Date of Death 4:15 a.m., 18th June 1931

死亡場所 東京市赤坂區氷川町五番地

10 Place of Death 5 Hikawa cho, Akasaka, Tokyo

所在地 東京市赤坂區氷川町五番地

11 Usual place of Residence 5 Hikawa cho, Akasaka, Tokyo

I certify that the above is true and correct to the best of my knowledge and belief.

署名

Signed (*註②)

(Dr. Furtwängler)

フルトウエングラー

住所

Address 26 Ichibeicho 2chome

Azabu, Tokyo

麻生區市兵衛町二ノ二

J. ROBSON

Embalmer & Funeral Director

2891, Nakao, Negishi-machi, Naka-ku

Yokohama

phone: 2-1546

横濱市中區根岸町仲尾二八九一番地

電話 2-1546番

ジュー・ロブソン

*注1 ゴシック部分は印刷、他は手書き。

*注2 病名の記述はラテン語か。再現を試みたが紹介者・黒木には判読し難い。

*注3 フルトウエングラーの自筆サインは割愛した。

資料② 『聖書之友』(第五百二十三号 一九三一年七月二十日発行 クエーカーライブラリー所蔵 TEMP MSS

980 BOX5) 掲載の四つの記事

プレスウエイト氏の永眠 (*注1)

基督教書類會社の社長であつて、我が聖書之友とは最も關係の深いジョージ・プレスウエイト氏が去る六月十八

日午前四時十五分享年七十一歳を以て卒然として永眠せられた。同氏は日本に於ける聖書之友の創立者であるドクトル・ホイットニー夫人(*注2)の實弟であつて、最初英國聖書協會の事業開拓の使命を帯びて我が日本に派遣されて來た人で、日本に於て殆んど初代から聖書の出版と其頒布に努力せられた忘るゝ出來得ない隠れたる恩人である。後に至つて基督敎書類會社の社長として、基督敎文献の爲め其書類の出版事業に盡されたる事は實に三十有余年で、前後四十六年間一日の如く倦まず繞まず忠實にかゝる隠れたる奉仕に一身をゆだねて居られた人である。同氏の永眠の悲報を大連に於て受理した記者は同氏を追憶すると同時に、同氏の日常を熟知して居る者として、すぐ心に浮かんだ聖言は『確くして揺くことなく、常に勵みて主の事を務めよ、汝等その勞の主にありて空しからぬを知ればなり』といふコリント前十五章の最後の聖句であつた。實にブレスウエイト氏の生涯は、此聖言に的確に當て嵌まるのであつて、恐らく同氏程仕事に熱心な忠實な人を記者は未だ會て知らないのである。

今日こそ我が基督敎界に於て文書傳道が旺盛を極めて居るが、これが進展を計つたのは實にブレスウエイト氏であつて我が國に於ける基督敎文書傳道に於ける功績は實に偉大なるものである。同氏は元來言葉の人ではなく(*注3)、實行の人である。表面の活動よりも隠れたる所に於て熱心なる奉仕を忠實そのものゝ權化の如く、人幾倍の働きを爲したのである。

同氏は國際的人であつて、其家庭はいつも内外人の來客を以て満たされて居つた。愛情のこまやかな親切な人であるのみならず、聖書は勿論、語學及び考古學の大家であつて其コレクションも甚だ多い。非常に面白い奇想天外から落ちると謂つたやうな性格が一面にあつて、外人として殊に漢學の素養が深く、時折ユーモアな事を陳べて人をよく笑はしたものである。同氏の家庭に由て靈的の感化と其恩顧を受けたる者は無數である。殊に外國宣敎師等は同氏の家庭を殆んど里親の如く思意して居られたとは其述懐である。同氏に關して澤山述べ度いけれど誌面

の余裕がないので、最後に畜一つ特筆すべき事は、同氏がクエーカー派の堅實なる信仰を以て居られた事で、信念に於ては極めて保守的であつたが愛情に於ては極めて廣く、其人格は最後に於て愈々陶冶練磨せられ、純潔なる聖徒として實に神々した域にまで達した事である。

*注1 ここには筆者の名前がない。雑誌の表紙に印刷された「目次」には山口瀧造とある。

*注2 クエーカー派では一八八三年一月に『聖書之友日課表』を創刊、これが八八年一月に『聖書之友月報』、九二年九月に『聖書之友雑誌』、更に同年一二月に『聖書之友』と誌名を変えている。この筆者はこういう変化には触れていない。

*注3 資料③にはAs a little boy he was troubled with an impediment in speech という記述がある。所謂「どもり」の癖があつて、彼は話すことが得意ではなかつたようである。多くの詩の創作や膨大な手紙類を書き残した彼の性癖はこのことも関係してゐるのではないかと推測される。

老聖徒を憶ふ

御牧 生(*注4)

我邦在留の英米宣教師間に先輩として、英國人間には最古参者として、大に尊敬せられたばかりでなく、多くの邦人基督者に、多數の學生青年に、大に敬愛せられたジョージ・ブレスウエイト氏は、去る五月下旬頃より急性關節炎に罹り大に惱まされ、赤坂區水川町の宅にて療養中の處、心臟病を併發し、去月十八日午前四時十五分、主に在て勝利と平安との裡に召を蒙り昇天された。行年七十一で、明治十九年に、二五歳の時、英國聖書會社日本支店長として横濱に來られ、其後基督書類會社社長として、専ら基督教文書傳道に力をつくされた其四十六年間の生涯は實に貴いものであつた同氏は世の耳目をひくやうな活動家ではなかつたが、隠れた聖き生涯を送くられた神の聖

徒であつた。私は今此老聖徒、此世を出發された此隠くれた人を憶ひつつあるが、自分の同氏につき、知りて居る處の事どもを少しばかり記してみたいと思ふ。

▲初對面の時

明治二十八年十二月の下旬推し詰まつた時であつた。私が福音の召を蒙りて立ち上りた其翌年で、一個の青年傳道者としての頃であつた。上海香港銀行の切手を振替て貰ふために、同氏を横濱山手の宅に訪問した其時同氏は感冒に犯されて臥床して居られたが、未だ會て一面識もない一青年を、實に其病室に通して、其處で親しく面會してくれた。臥床したまゝであつたが、満面微笑をたゞへて迎へられた其時の温容と態度とは三十七年を経過した今日でも忘るゝことができない。用件がすんでから、茶菓を出してもてなしてくれたが其時の菓子がクリスマスプツチニングで、貧乏な一青年洋菓を口にするには珍しいことであり、特にクリスマスプツチニングなどは全くはじめのもので、其時同氏は其菓子につき懇切に教へて呉れた。後に英國人の處で其同じ菓子でもてなしを受る度毎に、私は其時のことを必ず思出すことである。それよりも自分の靈魂に記銘されたのは、神の聖言である。其時其病室の壁に小さい額が懸つてあつた。同氏はそれをさし、あれは私の母から贈られたものであると語り、其聖言を讀んできかせてくれ、なにかいたした説明も解釋も加へなかつたが、祈祷のうちにきかされた聖言は聖靈に由て深く刻記された。

『汝等目を醒し堅く信仰に

立て丈夫のごとく強かれ』(哥前一六〇一三)

聴かされ、見せられた、私の心には、光り輝く金文字のやうに、見えた、觸れた、記るされた。

『草は枯れ、花は落つ、されど神の御言は永遠に保つ』ものである。聖言は活ける限りなく保つ、眞に生命の言で

ある。

▲ムデーの説教英長詩

それから余程たつた後のことで、氏はなほ獨身で麴町土手番町の閑静な家に住んで居られた時のことである。或日私は午餐に招かれて行たが、そのあとで、すぐに書齋で、讀んできかせてくれたのは、米國の有名な大傳道者ムデー氏の説教集の中より『基督は一切の一切』であると白ふのであつた。それを聴て居るうちに驚いたことは、元來ムデーと白ふ人は、未信者向きの極て單純な平凡な説教をする人であるとのみ思ふていたのである。それに、主キリストは我等のすべてのすべてであると白ふ、實に深い高いことを聞されたのであるから、驚くのは當然であるが、強く感じ、深く教へられた。それから續て、讀んでくれたのは、蘇國の古い傳道者サムエル・ルウサフオドの臨終の際の言をとりて長い詩に詠じた『インマヌエルの地に止る榮光、榮光』と白ふもので、句々言々天の音楽をきくやうな心地がして、靈魂はとかされてしまつた。すぐに共に跪いて祈祷を献げたが、聖靈に由て聖臨在は輝いて、其室は吾等には至聖所となつた。私は今もなほその時にうけた靈威は心に残りて居るやうな氣がする。

▲多數の青年を導いた

前にも白ふたやうに、氏は我邦の學生青年を多く愛して主に導いたものである。最初は汽車や電車の中で、僅少な言を交へて接近し、互に名刺のとりやりをして、それから小冊子や聖書を送り、自宅に招待して親しく交りて福音を語り祈禱りて導く、そんな教導をうけた青年が私の知つて居るだけでも多數である。その中には大政黨の新進の政治家もある、教育家もある。教役者もある。去る二十日の三田聖坂友會集會所の葬式にも、それらの方々が列せられていたので、私は講壇の上から、御互に青年時代に導かれた時のことを思ひ出して、うけた聖言を思ひ出して『救の喜』を新たにさせていただき、『初の愛に』歸らうではないかと、叫んだことであつた。

▲聖書の原語に精通した人

氏の父なる方は英國は勿論であるが、歐州大陸でも屈指のヘブル語の大家であつたさうで、その父をもつ氏もまた聖書の原語に精通された學者であつた。時々訪問しては、舊新約聖書中の大切な聖言につき、原語の意味につき懇切な丁寧な教へをうけたことが度々であつた。私が聖書講解に於て、また説教に於て、原語の意味はさうである、かうであると説明したり、講述することのある、その大部分は、同氏から教へられたものである。氏はヘブル語や、ギリシヤ語に精通したばかりでなく、（注5）、獨乙語にも佛語にも通じて居られた。また今では全く通用せない、古い蘇國語にも精通せられて、古い聖書研究會の話を、其古書から英譯されて出版になつて居るものもある。（注6）。元來同氏は寡言沈黙の人で學者であるにも係らず、少しも學者ぶらなかつたことは、實に奥ゆかしいことであつた。

▲救靈の熱情に燃えた

無口な人であつたが、多くの青年を導いた同氏は、伝道會に自ら出席せられて、祈祷をもて助けられた。

近い頃の事で其一例をあぐるならば、昨年の秋、私の四男の葬式の時のことである。會葬者の大多數は殆ど學生で、中學生の同級生や友人もあり、小學時代の同級生や友人もあり、日曜學校生徒の友人もあり、又運動の友人もある。彼の時、日曜學校の一教師が立て略歴を読み其信仰の生涯に及ぶや、一同深く感じたのであつたが、其夫人と共に會葬された同氏は、數日後面會した時に、さも口惜しいやうに左の言をもらした。

『あの時に私はあの澤山の青年たちを見ていたが、みな深く感じて涙を流さなかつた人は、一人もなかつたやうである。我は惜しいことをしたと思ふ、なぜなれば彼の時にすぐに救靈會を開いたら、あの青年たちはみな救はれたと思ふ。中田監督は、ドウしたのでしやう、惜しいことをしました、残念です』

かく申された氏の眼中にも心中にも、葬式、儀式、とか白ふものは、更になくて、ただ靈魂ばかりであつたやうに

思はれた。氏は沈黙の人であつたが、其時には能力もてる雄辯家のやうであつたのは、たしかに其心に救靈の熱情が燃えていたからである。

我等にも欲しいものは、辨舌でない、言語でない、その熱情、靈魂に向ふ熱情である。聖書の火である。

▲宗教詩人であつた

氏の母なる方が詩人であつた。『爐邊の讚歌』と題する小冊子は母堂の編集されたものである。其家庭が信仰のある聖い家庭であつたと思はるのである。氏の令姉ホイトニー夫人から私は青年時代に英宗教詩につき大に教へられたが、其令弟である同氏からも英宗教詩につき教へられた處が多くある。同氏は古い詩歌を小紙片にして印刷して配付されたが、氏の創作もある。*注す。後にいつか遺稿が出版さるゝであらう。

『ルウサーの國よりの詩歌』と題する、獨乙の中世紀時代の宗教詩歌をあつめた極て古い貴重な書を恵んでくれたが今や私にとりては大切な記念のものである。『汝自身と我』といふ表題の、獨乙の聖者テルスチケンの文書の抜萃した小冊子も、久しい以前に氏より贈物としてうけたものである。それは私の旅行中常に携帯したものである。

▲「神に會ふ備せよ」

恐ろしい此末の日に於て、寶血を崇め聖靈を崇めて、輝ける望を抱き、愛に燃やされ、堅く信仰に立ちて、静かに神と共に、此異邦の地にありて歩んだ聖徒の生香は實にかぐはしいものである。人の此世に於る事業なるものは、其人が此世を去ると共になくなつてしまふかも知れぬが、其聖い生涯の感化なるものは永遠に不朽である。血で、聖言で、聖靈で、全く造り上げられた、神の聖徒の人格の感化は、實に尊い。

私は氏が永眠さるる一週間前に、北海道に向ひ旅行する前日に其病床に見舞ふたが、急性關節炎のために四肢は包帯されて苦痛の中にあるも、なほ微笑をもらして挨拶された其元氣ある顔を見失ふことができない。

切迫した時に其令息から賽四三〇一の聖言を聞かされた其際に『大丈夫』だと元氣よく答へられた。

もはや昏睡状態に陥り意識も不明瞭になりつゝある其最後の瞬間に、眠よりさめたるやうに、両眼をばばちりと開いて、天を仰いで、輝ける顔を以て『オー主よ』と叫んだのが、最後であつたさうである。

其時に此老聖徒の上に天は開かれ、神の榮光の右に立ちたまふ主イエスを拝せられたのである。

『エホバを仰ぎのぞみて光をかうぶれり』

『光にある聖徒として、其愛子の國に還されたり』

其夫人の證する處によれば、此數年は、主の御再臨を待望む心はあつくせられたとのことである。最近の日記にも、主再臨の近くあることを深く感じて主を切に待望むことが記されてある。

私共も此老學徒の生涯を憶ひ、寶血を崇め、聖言を崇め、聖靈を崇め、主を迎へ奉る備をしたい。

救靈の熱情にもやさされて、一人でも多く、靈魂を主に導きたい。

昭和六年六月二十日の日暮時、青山墓地に、そのなきがらを埋むる其時、我等は

『それ主は、號令と御使の長の聲と神のラツパと共に、みづから天より降りたまはん、その時キリストにある死人まづ甦り、後に生きて存れる我らは彼らと共に雲のうちに取り去られ空中にて主を迎へ、かくていつまでも主と偕に居るべし、されば此等の言をもて互に相慰めよ』

(撤前四〇一六—一八)

との聖言にて今一度更に望を新にされた。

さきだちし友のかたみの旅衣

まとひて同じみちもやたどらん

*注4 雑誌の表紙に印刷された「目次」では御牧硯太郎となっている。

*注5 彼の蔵書の中にギリシヤ語・一六二一年の英訳・一八八一年の英訳の三つを見開き二ページに並べて読むことのできる

『聖書』一冊 (BOX1に収納) がある。

*注6 プレスウエイト述、『古き昔説話』(明治二四年三月 倫敦聖教書類会社刊 全一四ページ) という小冊子がある (BOX5に収納)。この小冊子は彼が英訳したものを更に和訳したものとと思われる。なお、「昔説話」には「むかしばなし」というルビがついている。

*注7 注3で述べたように、彼は長期間にわたって多くの詩を書いている。印刷・製本された詩集はないが、ノート状の詩集三冊が残っている (BOX6に収納)。

ジョージ・プレスウエイト氏の略歴

ジョージ・プレスウエイト氏は一八六一年三月五日英國ロンドンに於てジョセフ・ビーヴァン、マルサ・プレスエート氏の第七子 (第二男) として誕生いたしました。プレスウエイト家は第十七世紀即ちクエーカーと呼ばれた基督友會誕生以來この教團に属してゐた舊家であり、而してジョージ・プレスウエイト氏の育てられた家庭はイエス・キリストに對する愛と奉仕に満ちた宗教的家柄でありました。

ジョージ・プレスウエイト氏は齡十二歳の時信仰の生活に入り、教育を終つて後、ウエストモーランドのケンダールで伯父、チャールズ・ロイド・プレスウエイト氏の業に従つて居りました。併し、やがて主の召を感じ傳道の使命を帯び其奉仕に身を獻ぐる決心を致しまして、一八二六年^{*注8}五月二十九日齡二十五歳を以の英國聖書協會代表

として横濱に上陸したのであります。而して彼は爾來聖書出版の委員として三十五年、委員長として二十年の長い歲月の間盡粹せられ、殊に日本在住の初期は聖書協會の任務を帯びて殆ど日本全國を隅なく旅行し、別けて明治の初代に於て交通の不便の折柄、或は數週間或は數ヶ月に渉る長期の旅行の勞苦は容易ならぬものであります。けれど福音の證詞の爲め、聖書の普及の爲に斯かる困難を厭はず献身的に努力をされました。

聖書協會の責任をまぬかれた後、一九〇一年、基督教書類會社の責任を担ひ、爾來三十年間文書傳道に従事し、死に至るまで忠實に其職責を盡しました。

一九〇一年二月、彼はレティシヤ・イー・レツシユと結婚し家庭生活を営みました。其嗣子ジョージ・バーナム・ブレスウエイト氏及其妻は現今、アメリカ友會傳道會に所屬して傳道に従事致して居ります。

幼少の頃からジョージ・ブレスウエイト氏は決して頑丈な方ではありませんでした。日本に出立前、生命保險に加入せんとして加入し得なかつた程でありましたが、晩年に及んで非常に強壯になり今年三月彼の第七十回誕生祝賀に集つた友人達は、あれ程元氣な彼を見た事は會つてなかつたと申した程であります。五月の末頃彼は健康を損じ、六月一日彼が會つて四度苦しんだりウマチスであるといふ診斷を受けました。多少の心配はありましたが六月十五日に至るまで、さしたる事とも思はれませんでした。[＊]然し、突然同日正午の頃より重態に陥りました。以來常に危険状態を維持し、最後に當つて十二時間も引續いた意識不明の後、初めて目を開き、明瞭に『主よ』との一言を残して六月十八日午前四時十五分、傍にゐる者も殆んど氣附ぬ程静かに安らかに眠りについたのであります。

彼の地上に於る最後の言葉が、初め故國に於て、亦爾來四十五年の長き歲月に於て、彼が愛し選び採つた日本の國に於て、仕へまつらんと願ひ求めたものゝ聖名であつたことは相應しい事だと思はれます。

(右は六月廿日聖坂のフレンド教會に於ける葬儀の式場に於て、同派年會議長平川正壽氏の朗読せるものなり)

*注8 一八八六年の誤り。

彙報

ジョージ・ブレスウエイト氏の葬儀 基督教書類會社の社長であり、日本の聖書之友に採つては忘るゝ事の出來ない恩人であるジョージ・ブレスウエイト氏は去る六月十八日午前四時十五分天父の召を受けて安らかに永眠せられた。行年七十一歳。哀悼の念に堪へない。葬儀は同月二十日午後二時芝區三田功運町聖坂、基督友會に於て執行せられた(*註9)。内外の會葬者無慮數百名。盛大なる葬儀であつた。かくて即日青山墓地のドクトル・ホイトニーの母堂アンナ・エル・ホイトニーの墓の側らに埋葬せられた。同氏の逝去は我國の基督教文書傳道に採りては實に一大損失であり、亦一大打撃である。併し神は此事業の後繼者として令息バーナム・ブレスウエイト氏を起し、隅谷巳三郎氏、戸田建治氏等の補導に依つて、會社の事業が經營せられ、支障なからしめ給ふに至つた事は感謝の至りである。

(写真はジョージ・ブレスウエイト氏)

*注9 この葬儀の総理は隅谷巳三郎が務めた。またこのときに配布された印刷物 IN LOVING AND PRAISEFUL REMEMBRANCE of GEORGE BRATHWAITE と同じ葉は W.S. ヨルトンの詩を付して、ブレスウエイトの人柄をよく現すものになつてゐる (BOX6に收納)。

*注10 写真は割愛した。

資料② THE FRIEND (一九三一年七月三日発行クエーカーライブラリー所蔵 TEMP MSS 980 BOX5) 掲載の
記事

On the 18th of June news was received by cable from Japan of the home-going of George Braithwaite, after about two weeks' illness with rheumatic fever. He had recently celebrated his 70th birthday, and had spent forty-five years in Christian work in Japan.

George Braithwaite was the second son of J. Bevan and Martha Braithwaite. As a little boy he was troubled with an impediment in his speech, and his development was slow, but he early responded to religious influences. The dogged obstinacy which characterised him as a child became in after years the indomitable perseverance whereby he overcame the many obstacles that met him in his work in Japan.

The call to work abroad seems to have come quite early in his business life, and during his journey as a commercial traveller for I. Braithwaite and Sons, Kendal, he was diligently trying to acquire the rudiments of Chinese: that being the country to which he was first attracted. Several years passed and he was becoming increasingly valuable to his employers, but the steady purpose remained, and when in the spring of 1886 the way opened in the direction of Japan, he gladly responded. He went out in April of that year as sub-agent of the British and Foreign and Scotch Bible Societies.

The initial difficulties of the language did not prevent George from starting work almost at once in the distribution of Christian literature, and in other ways. During the thirteen years of his connection with the Bible Society, he travelled extensively in the interior, going into places where no European had preceded him. The experience of native life thus

acquired was invaluable in after years, though the hardships incurred and the frequent changes from foreign to native food, tried his health. Returning from his first furlough in 1894, he encountered a series of difficulties which for the time checked the work. Floods and drought crippled the resources of the farmers: and in August the Society's Depot in Tokyo was destroyed by fire, with all their books and types. For several months they were unable to obtain another suitable place, so that the sales for the year were much lower. The following year, however, 1895, showed a marvellous increase, reaching the extraordinary number of a quarter of a million. The war with China had brought fresh opportunities, and a tiny edition of the Gospel of John was specially printed for distribution among the soldiers. A few years later similar work was done during the Russo-Japanese War.

George Braithwaite's own Christian experience was a joyful one. His faith in God's forgiving love as revealed in Jesus Christ was simple and steadfast, and he was eager to use every opportunity of making known his glad message to the Japanese. Soon after getting to Japan he had had the little tract, "John 3.16," and also his favourite "Old Old Story," translated, and many thousands of both these were distributed by him. During his years of service with the Bible Society, he saw the completion of the Japanese translation of the whole Bible, and had himself helped in correcting the proofs, as well as in transliterating the New Testament into Roman characters, when an edition was needed for use in the public schools.

Although his poor health obliged him to resign his post as agent of the British and Foreign Bible Society in 1899, his interest in providing Christian literature for the Japanese was unabated, and he devoted the last twenty-nine years of his life to the Japan Book and Tract Society, whose Secretary he now became.

Early in 1901 George Braithwaite was married to Letitia E. Lesh, a young Scotch missionary, and henceforth they were one in their devotion to the Lord and His work. For many years L. E. Braithwaite has been a member of the Field Council of the Japan Evangelistic Band. Their only son, George Burnham Braithwaite, and his wife are working in Japan with the Philadelphia Friends' Mission.

(* 注) ここに焼失した印刷所前で写した写真が挿入され、写真の下に次の説明)

At the Printing Work, July 5th. 1929. the morning after the fire, with two principal Japanese helpers.

(on the right): the printer on the left

As Secretary of the Japan Book and Tract Society G. Braithwaite was able to co-operate with other missionary bodies, and became widely known. Each year he prepared and published a list of the names and addresses of all the Protestant missionaries in Japan, which proved a most valuable bond of union. These twenty-nine years were full of varied experiences. The long war with Russia, 1899-1905, with its work for the soldiers and for the Russian prisoners of war; the Tokyo Industrial Exhibition in 1907, affording opportunities of distribution to the many thousands who flocked from the provinces; and many local instances of famine or earthquake when relief work gave special opportunities for tract distribution, could be mentioned. When we realise what great readers the Japanese people are and that 90 per cent. of them are literate, and that much of their present-day literature is harmful, we can better understand the value of such work.*

The effect of the Great War was mainly felt in the higher cost of labour and material and of living generally, which resulted in a great diminution of book sales.

The terrible earthquake of September, 1923, destroyed not only the Tract Depot, but also the printing works, where the books, types and plates were stored. Four hundred employees of the great Christian printing company also perished. Again, in July, 1929, the printing house was burnt to the ground, together with several thousand copies of books and tracts and the whole of the plates and shells. It was a great challenge to his faith, but George Braithwaite, although now approaching his 70th birthday bravely faced the situation. Secounded by his splendid Japanese helpers, he began to plan for

*The following are a few amongst the very many valuable books translated and published, viz.: *The Pilgrim's Progress, Helps to the Study of the Bible, The travellers Guide*, Trench in *The Parables* and on *The Miracles, Like Christ and With Christ in the School of Prayer* by Andrew Murray, *Talks to Men about the Bible* by R.A. Torrey, *Christian Living* by F.B. Meyer, *The Imitation of Christ* by Thomas a Kempis, *Christ in all the Scriptures* by A.M. Hodgkin, *Life of Dr. Willis N. Whitney*, and many other Christian biographies.

the reproduction of the plates and books, and six months later in the annual report he was able to say that the sales were practically unaffected. For the last five years the motto verses on his Reports have been, "Blessed are ye that sow beside all waters" (Is.xxxiii. 20) and "In due season we shall reap, if we faint not" (Gal.vi.9).

Besides the Book and Tract Society our Friend gave much time and strength to the Scripture Union of Japan, the

Akasaka Hospital Gospel Society, and many other other kindred efforts.

The following points in his character were specially noticeable: his exceedingly careful attention to detail; the quiet humour that lighted up his narratives of personal experiences, and his enduring love, which never slackened for those whom he had made his friends.

His place will be hard to fill, but the work must go on. "Pray ye therefore the Lord of the harvest, that He will send forth labourers into His harvest" (Matt. 9, 38).

"Yet pray that the Master's eye

May fall on the vacant place.

May look on the sickle lying still

And give it to one who loves His will,

Called by His grace.

Yes, pray! 'is the Master's word,

Grieve not that the reapers fall;

But rather give ye Him hearty thanks,

Who liveth ever to fill the ranks,

The Lord of all."

In the Times of June 22nd is a notice of the death of George Braithwaite, of Tokyo, "from 1886-99 representative of the British and Foreign Bible Society in Japan, and for twenty-nine years of the Religious Tract Society, aged 70."

I had the great happiness of being entertained by George and Lettice Braithwaite for six weeks when I visited Japan in the autumn of 1928. They gave me the freedom of their home, and let me come and go as I liked. They were desirous that I should see and enjoy everything possible in the time, and on the occasion of my first earthquake, George Braithwaite knocked at my door after I had gone to bed to make sure that I had not missed it.

With his long experience of the country and knowledge of the language, George Braithwaite could get into very intimate touch with the people. I listened to an address at the little meeting near his home one Sunday. I could not understand a word, but I could tell from the faces how closely they were following and appreciating every word. In life even more than in speech he was a true Quaker ambassador.

George Braithwaite was very like his younger brother, William Charles, without his genius but with perhaps greater charm. A very quiet man, with a quick sense of humour and a gift of telling quite unbelievable stories. One little experience of mine will show how ready he was to appreciate a joke at his own expense: the Sunday paper was always put away unread till Monday morning: but one Sunday morning our Friend remarked that there was a forecast of a fine day.

I innocently inquired where he had got the news, and he twinkled joyously at having been caught taking a little peep at the forbidden secular paper!

I found that he shared the habit of spending long happy hours over quite useless employment. He did not play Patience, nor do jig-saw puzzles, but he collected penny postage stamps, and arranged them in many volumes, examining them under a magnifying glass and sorting them according to almost invisible marks. He was a lovable man and will be widely missed.

LUCY F. MORLAND